社会が僕らを必要としてくれたら、僕らはそれにキャッチアップしていかなくてはならない。

特定非営利活動法人 ジャパンハート ファウンダー・最高顧問 小児外科医 吉岡 秀人

「医療の届かないところに医療を届ける」をミッションに、ミャンマーやカンボジア、ラオスなどの途上国での医療活動や、医師不足が深刻な日本国内のへき地離島への医療者派遣をおこなう、国際医療ボランティア団体のジャパンハート。今から25年前の1995年、医師である吉岡秀人先生がミャンマーに渡り、たった一人で始めた地道な活動が、今日のようなNGOとなりました。そこで今回は吉岡先生に、ジャパンハートや先生ご自身が大切にされていることなどについて伺いました。

●

—吉岡先生が医師になった動機について、教えていただけますか。

吉岡　僕は、1965年に大阪の吹田市で生まれました。かつて、吹田駅には地下道があったんです。ジメジメしていて、雨が降ったら水がなだれこんでくるような、そんな感じの地下道で。5歳の頃、そこで戦争で身体の一部を失った戦傷病者が並んで座っているのを見て、その光景が目にずっと焼きついていました。同じ頃、吹田市では大阪万博が開かれ、世界中からものすごい数の人が集まり、にぎわっていました。当時の吹田市は、一方では戦争を引きずっていて、もう一方では夢と希望にあふれているという、過去と未来を同時に抱え込むような街でした。

そんな記憶とともに成長した10代のとき、ハッと気づいたんです。偶然与えられた、時間と空間の交わったところに僕は存在していて、たまたま幸せだったけれど、もし20年前に生まれていたら、戦争に巻き込まれていたかもしれないと。また、1965年に中国で始まった文化大革命では、多くの人が亡くなっていました。さらに同じ時期にベトナム戦争もあり、70年代に入ると、カンボジアの内戦で大虐殺がありました。

20年という時間のズレ、飛行機で数時間という空間のズレによって、運命がこれほど大きく変わることに気づいたら、自分の生き方が情けなくなったというか、申し訳なくなってきて。「何か世の中のためになることをしなくては」と思いました。このとき、僕には医師になることしか思いつかなかったんですよ。今だったらインターネットで調べて、いろんな可能性を考えることができると思いますが、当時は情報を手に入れる手段がなかったんです。

—その後医師になって、ミャンマーに行ったのは、どんなきっかけからなのでしょうか。

吉岡　医師になると決めたとき、誓ったことがありました。それは、「経済的な事情で医療を受けられない人のための医師になる」ことです。近くに病院があっても、医療を受けられない人がこの世界にはたくさんいるから、そういう人たちに無償で医療を届けようと思いました。

そして医師になり、30歳のとき、ミャンマーで働く医師を探していると聞き、迷わず行くことにしました。

—実際にミャンマーに行ってみて、どうでしたか?

吉岡　当時、ミャンマーの平均寿命は約50歳でした。ということは、5歳以下の子どもたちがたくさん亡くなっているということなんです。

ミャンマーで診療所を開くと、親に連れられた病気の子どもたちが、毎日押し寄せて来ました。僕は、朝の5時から夜の12時まで、一人でひたすら診療と治療をしました。でも当時は、手術ができませんでした。設備もないし、しょっちゅう停電するし、看護師もいないので。

—当時、途上国で医療を提供する医師は、ほかにもいたのでしょうか。

吉岡　紛争地域に行って、生命の危機に直面している人たちに医療を提供する団体はありました。でも、数としては圧倒的に多い、貧困で医療を受けられない人たちに特化して、医療を提供する人はいなかったと思います。

当時、ミャンマーで知り合った日本人は、国連や外務省から派遣された人たちでした。僕は彼らから「吉岡さんがやっている医療や支援は古いよ」「患者は無限に押し寄せてくるから、そうやって一人ひとり診ていてもきりがない。僕らと一緒に大きなプロジェクトをやったら、もっと多くの人を助けることができるよ」「吉岡さんがやっていることは、サスティナブルじゃないよ」などと言われていたんです。

あまりにもそう言われるものだから、僕は自分がやっていることが正しいかどうか分からなくなって、悩みました。その一方で、「日本でも医師が一生懸命、患者を一人ひとり診ているのに、なぜ途上国で同じことをしたらこんなに批判されるのか?」という疑問もありました。

でもある日、ハッと気づいたんです。朝、部屋のカーテンを開けたときに見える患者の数が、日に日に増えている。その人たちは、何時間もかけてここにたどり着いている。僕がやっていることが間違っていたら、患者は増えないはず。だけど毎日毎日、僕を求める人が増えていく。それに気づいたとき、「これこそが正解なんだ」と確信しました。

当時、古いとかサスティナブルじゃないとか言われた医療は、時代に合わせて少しだけ変えてはいますが、25年たった今も続いています。

残念ながら、助けられなかった人もたくさんいます。でも「今日助けられなかったなら、明日からどうするか?」ということを常に考えて取り組んできた結果、一緒に活動してくれる仲間が増えていきました。

—現在、何人のボランティアが、ジャパンハートで活動していますか。

吉岡　医療者、非医療者など年間で約800人が、一緒に働いてくれています。年々、若い人たちが増えているんです

よ。彼らにとっては、物質的な豊かさがイコール幸せではなくて、人から必要とされている、役に立っているという実感が、幸せを感じることなのだと思います。

日本の様々な技術や産業がほかの国々に追い越されている中で、日本が世界に誇れるものは何かと言ったとき、その一つに医療があると考えています。つまり、本当の豊かさを十分に享受した社会だからこそ生みだせるものを、日本だけでなく世界にも提供していくということです。

だから僕は、若い人たちが世界で誇りをもって働けるように、ジャパンハートを成長させていかなくてはならないと思っています。医療者が現地の人たちに感謝され、世の中に必要とされていると感じながら働き、その結果、医療を受けられなくて困っていた人たちが救われ、みんなハッピーになっていく。誰も損をしないですよね。

―では、吉岡先生が求める医療の在り方とは、どのようなものですか。

吉岡　医療とは、患者の「人生の質」を上げる作業だと考えています。「どんな人生だったら後悔するんだろう？　満足するんだろう？」と考えたとき、人から大切にされている、必要とされている状態に包まれていることが、最も大事なことなのだと思いました。それこそが、人間が求めている幸せなのではないでしょうか。

肉体が救われなくても、心が救われれば、人間は幸せになれるし、自分の生を肯定できると思うんです。たとえ短い命でも、最期に「いい人生だった」と思ってもらうことが、僕が求めている医療の形です。

たとえ１００人しか診ることができなくても、その１００人の「人生の質」が上がるなら、それでいいと考えています。それでも少しは、世の中が変わりますよね。少なくとも、その人たちの人生は。

―今日に至るまで、多くのご苦労があったのではないでしょうか。

吉岡　確かに、いろんな苦労はありました。でも、苦労しているのは自分だけではないし、自分の苦労は自分が自分に課したものだから、仕方ないですよね。ただ言えるのは、一生懸命に生きている人間は苦労するということです。一生懸命に走っている人間にしか、向かい風は吹いてこないので。苦労は嫌ですよ（笑）。でも、苦労に立ち向かうことで、僕は僕自身を知ることができます。自分が苦しみと一体化していると、苦労に振り回されて終わります。でも、その苦しみを客観視して、そこから何を学ぼうかと思った瞬間に、苦労をコントロールできるようになります。

―ご自身やジャパンハートについて、どんな未来を思い描いていますか？

吉岡　未来は未来になってみないとわからない、というのが僕の感覚です。山に登ってみて、初めて見える景色がある。それと同じで、そのときになってみないとわからない。

山に登ることは、重力に逆らうことです。だから、しんどい（笑）。その一歩一歩が、僕の毎日なんです。

山に登るときは、足元を見ながら登りますよね。それと同じで、僕も毎日毎日、目の前にあるソーシャル・デマンドに応えていくだけです。

初めてミャンマーに行ったときは、ＮＧＯをつくるなんてまったく想像していませんでした。毎日、押し寄せてくる、目の前にいる患者をひたすら治療して、やがて、僕一人の力では及ばなくなって、仲間を集めた。でも、数人の仲間でも追いつかなくなってきて、組織をつくる必要があった。そして、難病やがんの子どもたちの手術や治療をするために、現地に病院を設立した。そうやってきただけです。

社会が僕らを必要としてくれたら、僕らはそれにキャッチアップしていかなくてはならないと思っています。これからも、貧困や医師不足で困っている人たちに医療を届け続けて、支援してよかったと思ってもらえるようなジャパンハートにしたいし、僕と一緒に活動できてよかったと思ってもらえるような、自分でありたいです。

●略歴
特定非営利活動法人 ジャパンハートファウンダー最高顧問
小児外科医　吉岡　秀人（よしおか・ひでと）
１９６５年大阪府吹田市生まれ。大分大学医学部を卒業後、大阪、神奈川の救急病院に勤務。１９９５年から2年間ミャンマーにて医療活動に従事。１９９７年に帰国し、国立岡山病院、川崎医科大学で小児外科医として勤務。２００３年に再びミャンマーに渡り、医療活動に従事。２００４年４月、国際医療ボランティア団体ジャパンハートを設立。２０１７年６月、特定非営利活動法人ジャパンハート最高顧問に就任。